二上山の自然

4 二上山の植物

山口龍治

二上山は瀬戸内火山帯に属する旧火山群で、特殊な火山岩が多く地学や考古学のみならず、植生に於いても他に例の見ない独特な植物相を形作っています。また、二上山に隣接した平地部にも珍しい草本植物がたくさん残っています。地学的な分野は、二上山博物館で紹介されており、とりたてて言うに及びませんが、二上山の植物を語るに当たり、とても大切なことなので地史的な背景に触れながら話しを進めていきたいと思います。

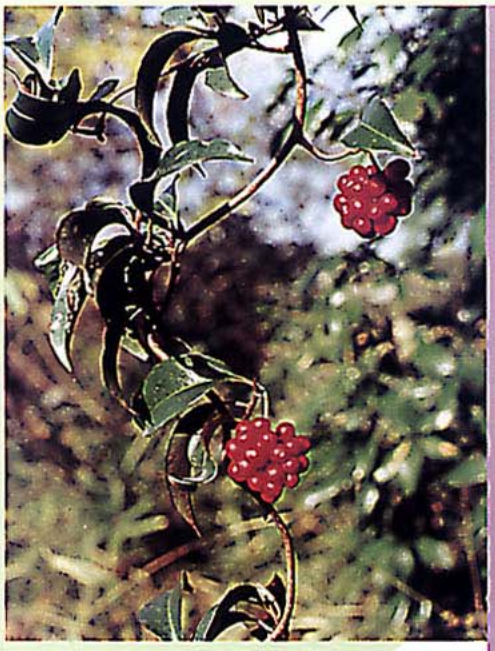
メダラ（雌椴） タラノキよりも太く針が少なく短い。スーパーでタラの芽として売られているのは本種です。

リュウノウギク（竜脳菊）
日本固有の野生菊。茎や葉に竜脳香に似た匂いがある。

ツクバネウツギ（衝羽根空木）
花のあとの5枚のがく片を羽根つきの衝羽根に因んだ名前。

二上山が誕生する以前は、第一瀬戸内海と呼ばれる海の底でした。現に屯鶴峯の近くから「キリガイダマシ」など海に棲む貝の化石を含む地層が少し残っています。この海は、第三紀中新世の終わり頃（約二千万年前）には干上がり淡水湖となりました。次の鮮新世の時代は、地殻変動の激しい時代で近畿地方の山地と平地の原形が出来あがり、この頃に二上山は火山活動が始まったと言われています。火山のため強い酸性で、植物が生えるには長い年月がかかったことでしょう。けれど、二上山の岩石が風化・浸食を強く受け、二上山のまわりにこれらの土砂が堆積してできた地層（二上層群）の一部からは、「フウ、タイワンスギ、メタセコイア、バラモミ、ヤブニッケイ」などの南方系の樹木や「カエデ類、ヤナギ類、ホオノキ、クヌギ、ブナ…」といった北方系の樹木の葉の化石が交って見つかっています。このことからも、人が住み着く以前は、今よりも深い森が発達していたことがうかがえます。これは、古第三紀は、暖かい時代と寒い時代が交互に訪れたことを物語っています。暖かい時代とは、北海道の炭鉱からバナナの葉の化石が見つかっていることからも、どれほどの暖かさであったか容易に想像できるでしょう。

二上山の火山活動が終わったあとの時代に、古代大阪湾が深く山の近くに入り込んだ時代があり、この時に「ハマヒサカキ、クロマツ、ヤマモモ、イヌビワ、サネカズラ、オニヤブソテツ、ハンカイソウ、コバノタツナミソウ」などの海洋性植物が二上山に分布を広げ、元からあった「テイショウソウ、ミヤコアオイ、テンナンショウ類」などの起源の古い植物と入りまじり、二上山特有の植物群落ができあがったと考えられます。現在、古い時代



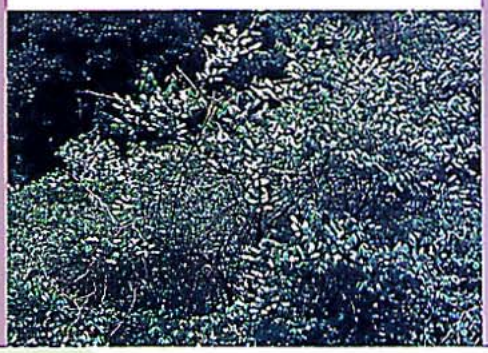
サネカズラ（実葛）
サネは古名のサナの音転。サナ葛は滑葛（なめりかずら）の意味でこの二字を取った名。枝の粘汁を水と混ぜ頭髪を整えたことから美男葛（びなんかずら）とも言います。葛はつる植物のことです。

ムロウマムシグサ（室生蝮蛇草）
二上山の谷筋や湿った所に多い。浦島草を含め、この仲間の大部分を天南星（てんなんしょう）といいます。

ウラシマソウ（浦島草）
細長く伸びた花の付属体が浦島太郎の釣り糸に因む。花の色素のない珍しい異常型で畑の春日神社で見られた。

コバノタツナミソウ（小葉の立浪草）
立浪は花が泡立つ浪に似ていることから。

コモウセンゴケ（小毛氈苔）
取もち式捕虫を行なう食虫植物。県下でも珍しい植物で、くっついた虫の大きさにもよるが15日位で消化します。



ウワミズザクラ（上溝桜）
ミゾがミズに転化した名。昔、亀甲占（きっこううらない）にこの材に溝を彫ったのに因む。

の樹木が残っていないのは、石器時代の昔より、石器の材料のサヌカイトや凝灰岩の採掘など人為的な乱伐が加わり、その後の時代も建築材用に木を切られたものと思われ、社寺林にのみ、わずかながらその面影を留めているにすぎません。

近年、環境の変化とともに二上山から姿を消したと思われる植物は「ハンカイソウ、コバノタツナミソウ」の海洋性植物が挙げられます。この二種類は今まで記録のないものです。大阪平野は開発が進み、二上山にのみ細々と残っていた植物です。その他「オキナグサ、フデリンドウ、ゴマギ」など多くの植物が姿を消しています。また、姿を消しつつある植物に「ササユリ、コモウセンゴケ、ホタルカズラ、オミナエシ」など多種類にのぼります。二上山は僅か四～五百米の低い山にもかかわらず、植物の種類数は約六百種（帰化植物を除く）ときわめて豊富であり、かつては「花の山二上山」と言われ、植物観察の好適の山として親しまれてきました。ササユリは、近年都会で高価で売られるようになり、心ないハイカーによって球根ごとねこそぎ抜かれているのが現状です。（自家栽培されても花が咲きません。）

古代から現在まで各時代に応じ、幅広い用途で自然の恵みを受けてきた山。そして地学、考古学、宗教、文学と幅広い分野で語り継がれてきた類稀な山なのです。このように私達が受けてきた自然の恵みの恩恵には測り知れないものがあります。今、私たちは、自然保護という形で、この恩返しをする時が来ているのです。そして後世の人たちにも豊かな、二上山の自然を語り、引き継ぎ、「花の山二上山」の言葉を消さないためにも。